

国際

インドでのもったいない運送 普及に向けて

有限会社鹿毛運輸 安武智史

もったいない運送を通じて僕が得た感動は主に2つあります。それは、コミュニティビジネスに従事する同年代の方々との出会いと、その方々と共に仕事をする時のスピード感です。

僕は国際協力の世界で食べていけるようになりたいと思い、知人の紹介で有限会社鹿毛運輸に入社しましたが、代表の鹿毛が僕に教えてくれた世界は「ボランティアを事業化していくコミュニティビジネスの世界」でした。もったいない運送はトラックの運転手という僕の普段の仕事とボランティアをミックスさせて事業化していける可能性を秘めた活動で、この活動を通じて出会えた方々は僕と同年代でありながら、すでにコミュニティビジネスで生計を立てている方々でした。そこに衝撃と大きな感動を覚え、早く僕もコミュニティビジネスで食べていけるようになりたいと思いました。また、この活動をしている時は、コミュニティビジネスをされている方々の拠点に行くのですが、出会う方々にはコミュニティビジネスの組織の代表をされている方々も多く、仕事をこなすスピードが僕とは比べ物にならないくらいに速くて正確でした。そのスピード感に触れている時は、僕を取り囲む世界が変わっていることを体感でき、感動していました。これは僕が目標とする世界に触れている瞬間で、自分に厳しくすることで、もっともっと進めて皆に追いつく決意をしました。

そんな僕の想いを察してくれたのか、鹿毛が僕への最後の経営指導の場として提供してくれた場所があります。それはインドで、その中でもアッサムという地域です。聞くところによると、アジア諸国のほとんどの国では外資の手が入っているそう



ですが、インドのアッサムはテロも多く、日本人がほとんど入っていない未開の地で、もったいない運送のような新しいシステムの運送活動を展開するには絶好の地ということでした。この地を片岡先生から紹介を受け、その後鹿毛がインドのダーウィンスクールオブビジネスの Dr. Anirban Chaudhuri 理事長と関係性を築いてきました。僕はこの地でもったいない運送を進めていきます。また、実施するにあたり、日本で出会ったような若い経営者やリーダーと一緒に活動をしていきたいと思っています。



昨年12月、インド・ウダイプルで開催された国際会議へ行く途中

僕が日本でもったいない運送に取り組んでいた関係で、以前にインドからの留学生を受け入れたことがありましたが、彼らはとてもフレンドリーで優しさの中にも力強さのある目をしていました。インドには彼らのような若者がいる大学やビジネススクールがたくさんあると思います。そんな学術機関や福



アッサム警察の護衛がつく程、治安が悪い